



ラ シ ー ヌ

鈴木力衛 編

世界古典文学全集

48

筑 摩 書 房

ラシーヌ

世界古典文学全集 第48巻

昭和40年12月15日発行

訳者代表 鈴木力衛

発行者 古田 晁

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京 4123 電話 (291) 7651

人名・地名対照表

(1) この対照表は、フランス語読みから原語読みを知るためのものである。したがって、日本の慣用に従ったもの、および、原語読みと変らないものは省いた。配列は五十音順。

(2) 『旧約聖書』の世界に取材した『エステル』『アタリー』、トルコの宮廷のできごとを扱った『パジャゼ』を除いて、固有名詞の原語はギリシア語とラテン語にあるものである。前の二篇においては原語として、日本聖書協会発行の『聖書』の表記を掲げるとどめた。

(3) 本文の登場人物名のうち、典拠がなく、ラシーヌの創作したものについては、この表から省いた。

ア行

アガメムノン——アガメムノン
 アグリビース——アグリッピナ
 アシール——アキレウス
 アステリアナクス——アステュアナクス
 アタリー——アタリヤ
 アトレ——アトレウス
 アマン——ハーマーン
 アミュラ——モラート、ムラート
 アリアヌ——アリアドネー
 アレクサンドル——アレクサンドロス
 アンチオーブ——アンチオパー
 アンチゴース——アンティゴネー
 アンティオキウス——アンティオコス
 アンδροマック——アンδροマケ
 アントワース——アントニウス
 イカル——イカロス
 イダスプ——ヒュダスベース
 イデュメ——イドマエア（エドム）
 イフィジェニー——イーピゲネイア
 イブライーム——イブラーヒーム
 イポリート——ヒッポリュトス
 ギュアスティ——ワシテ
 ギュエスパシアン——ウェスパシアヌス
 ギュエニウス——ウエヌス（ラテン）、アプロディーテ（ギリシア）、（ヴィーナス）
 エキューブ——ヘカペー
 エクトール——ヘクトール
 エジェ——アイギウス
 エディブ——オイディプース
 エテオクル——エテオクレース
 エノバルビュス——アエノバルブス
 エビドル——エビダウロス
 エピール——エパイロス
 エフェーズ——エベソス
 エモン——ハイモーン

エリード——エーリス
 エリフィール——エリビュレー
 エルキュール——ヘラクレス
 エルミオース——ヘルミオネー
 エレクトー——エレクトュス
 エレスポン——ヘーレスポントス
 エレーヌ——ヘレネー
 オーギュスト——アウグストゥス
 オクタヴィー——オクタヴィア
 オステイー——オステイア
 オトン——オト
 オーリッド——アウリス
 オレスト——オレステース

カ行

カイユス（カリギュラ）——ガイウス（カリグラ）
 カッサンドル——カッサンドラー
 カピトル——カピトリウム
 カリギュラ——カリグラ
 クサント——クサントス
 クシファレス——クシパレス
 クリテムネストル——クリュタイムネーストラ
 クレオパートル——クレオパトラ
 クレオン——クレオーン
 クローディウス——クラウディウス
 ケルズネーズのトリック——ケルソネーソスのタウリス
 コシット——ユキュトス
 コマジエヌ——コマゲネー
 コルビュロン——コルブロー

サ行

ザカリ——ザカリヤ
 ザレス——ゼレン
 ジェルマニキウス——ゲルマニクス
 ジュニー——ユーニア
 ジュノン——ユーノー
 ジュピテル——ユーピテル（ゼウス）

2 対 照 表

ジュール——ユーリウス（ジュリアス・シーザー）
ジョアス——ヨアシ
ジョアド——エホヤダ
ジョカスト——イオカステ
ジョザベト——エホシバ
シラ——スエラ
シラニウス——シーラーヌス
シリシー——キリキア
シロン——スキロン
シンメリア——キンメリア
スカマンドル河——スカマンドロス河
セザール——カエサル
セザレ——カエサレア
セネシオン——セネキオ
セルシオン——ケルキュオン
ソリマン——スレイマン

タ行

タクシル——タクシレース
タンダール——テュンダレオス
ディアース——ディアーナ
ティエスト——テュエステス
ティテウス——ティトウス
ティベール——ティベリウス
テゼー——テセウス
テナール岬——タイナロン岬
テレマック——テレマコス
ドミジュス——ドミティウス
トラゼアス——トラセア
トレゼース——トロイゼーン

ナ行

ナルシス——ナルキッスス
ナンフェー——ニュンバイオン
ネプチューヌ——ネプトゥヌス
ネロン——ネロ

ハ行

バジファエ——バーシファエ
バジャゼ——バーヤエジト
バトロータル——バトロクロス
バラース——バルラス
バルタ——バルカ
ビザンス——ビューザンティオン、ビザンチン
ビゾン——ビーゾ
ビテー——ビットウス
ビラード——ビュラデーヌ
ブリトユス——ベイリトオス
ブリュス——ビュロス（ネオプトレモス）
ビュリュス——ブルルス
ファース河——パース河
ファルナス——バルナケース

フェードル——バイドラー
フェリックス——ペーリクス
ブリアム——ブリアモス
ブリジー——ブリュギア
ブリタニキウス——ブリタニクス
ブリュチウス——ブルトウス
プロクリュスト——プロクルステス
ブローチウス——ブラウトゥス
ベリペー——ベリボイア
ベレ——ペーレウス
ベレニス——ベレニーケー
ボスフォール——ボスボロス
ポリタセウス——ポリュクセネー
ポリニス——ポリュネイケース
ポリュス——ポーロス
ボンペー——ボンペイウス

マ行

マタン——マッタン
マルドシエ——モルデカイ
マンリウス——マーンリウス・トルクアトウス
ミトリダート——ミトリダテース
ミノートル——ミノタウロス
メジェール——メガイラ
メデー——メーディア
メネセ——メーノイケオス
メネラス——メネラーオス
モニーム——モニメー

ヤ行

ユクサン——黒海
ユリス——ウリクセス（ラテン）、オデュッセウス（ギリシア）

ラ行

ライユス——ライオス
ラリス——ラーリッサ
リヴィー——リヴィア
ロキュスト——ロータスタ
ロクサーヌ——ロクサーネー
ロクセラヌス——ロクスラーナ
ロード島——ロードス島

目次

ラ・テバイツド	渡辺清子訳	5
アレクサンドル大王	大島利治訳	45
アンドロマック	安堂信也訳	85
裁判さちがい	鈴木木康力衛司訳	133
ブリタニキユス	渡辺守章訳	167
ベレニス	戸張規子雄訳	223
バジャゼ	安堂信也訳	263
ミトリダート	渡辺守章訳	307
イフィジエニー	戸張規子雄訳	351

フ
エ
ー
ド
ル

エ
ス
テ
ル

ア
タ
リ
ー

解
説

年
譜

地図・人名地名対照表

二
宮
フ
サ
訳
395

福
井
芳
男
訳
443

渡
辺
義
愛
訳
477

渡
辺
守
章
525

ラ
シ
ー
ヌ

凡 例

この巻の人名、地名の表記は原則としてフランス語よみに従った。例外として、ギリシア、アテネ、スパルタ、ローマ、ユダヤ、ユフラテス等々のように、日本で慣用されているものはそれをとった。フランス語よみから原語よみを知るためには、巻末の対照表を参照されたい。

ラ・テバインド 別名 兄弟は敵同士

ラシーヌの劇作として始めて陽の目を見た『ラ・テバインド』は、その創作事情について多くの伝説を背負っている。『モリエールの生涯』の著者グリマレは、ブランはモリエールのもので、それを詩句に直せと言われたラシーヌがロトルーの引き写しをしたので、それを更に直させたのだ、と伝えているし、プロセットもまた、モリエールがラシーヌに、ボワイエの『ラ・テバインド』に対抗すべくロトルーの『アンチゴーンヌ』を書き直したらどうかと薦めた、と言っている。なお、ラシーヌが親友ル・ヴァスールに宛てた書簡によって、創作の進行状態や、モリエールに対する当時のラシーヌの態度が想像出来るが、さまざまな資料を綜合して、オテル・ド・ブルゴーニュで上演される予定のボワイエの『ラ・テバインド』に対抗させるべく、モリエールの依頼で、そのバレ・ロワイヤル座のために、この『兄弟は敵同士』が書かれたと考えることが出来る。しかし、創作過程でのモリエールの介入等は信憑性がない。その初演は一六六四年六月二十日、芝居評判記者にもこの新人の新作は完全に黙殺され、客の入りも悪く、モリエールは『飛び医者』『袋の中のゴルジビュス』『コキュ・イマジネール』で埋め合わせをしなければならなかった。しかし、ラシーヌを励ました何人かの人々のうちに、文芸の庇護者として隠れもない、ド・サンテナン公が数えられていたことは、この作品によって、悲劇作家ラシーヌの宮廷詩人としての榮達に、礎石が据えられていたことを物語る。

アポロンの神託どおり、父を殺し母と結婚したことを知ったエディプは、自ら目を抉って盲目となり、王位を自分の双子の息子エテオクルとポリニスに譲り、二人が一年交代で統治せよと命ずる。しかしエテオ

クルが期限が切れても王位を譲らないため、ポリニスは義父のアルゴス王の軍勢を頼んでテバインドを包囲する。ラシーヌの悲劇は、まさにこの兄弟の「憎しみ」を主題にした。素材としては、序文に挙げられているエウリピデスの『フェニキアの女たち』と、特にロトルーの『アンチゴーンヌ』、そしてセネカやガルニエの作品、あるいはスターティウス叙事詩等との関連が指摘される。しかし、コルネイユに代表される一六四〇年代的劇作からは、神聖な絶対王権と民衆の支持による王権の対立等政治上の月並みな議論の雄弁な展開、わざとらしい大時代な悲愴味、内容空疎なスタンス、など、悪い面ばかり模倣していると言われる。

しかし、この処女戯曲は、それらの欠点にもかかわらず、本質的にラシーヌのものである要素を、既にはつきり示している。それは、ラシーヌ自身エウリピデスの『フェニキアの女たち』に註記しているように、劇的運動から一切の無駄を省き、人物の感情の論理として必然的なもののみ残すことである。またそれは、人物達の上に覆い被さる運命の存在と、人物達の自由性との関わり合いに見受けられる、ラシーヌの悲劇性の特徴である。ピカールの指摘するように、登場人物達は（そして彼らと共に観客も）、劇の進行において、絶えず宿命を自覚しつつ、同時にその力を否定する事が出来る。五幕を通して、殆ど各幕に一つあるいはそれ以上のどんでんがえしがある。そして、すべて登場人物の努力が無駄に終った時にのみ、観客は神々の手になる、宿命の不動の存在を思い知らされるのである。しかも、人間の自由と神々の呪いとを、作品の次元で両立させるために、人間の情念の中に、彼らの宿命的な行動の動機が据えられている。その憎悪が全く「肉体的なもの」であることも、ラシーヌの悲劇的情念の本質である。クレオンもまた、その絶望の狂乱によってオレストの狂乱を予告するだけではない。悲劇の環から脱出しようとして破滅する人物、例えばポリニスをも予告していると考えられる。こうして、二十四歳の青年劇詩人の稚拙な筆の下から、既にその悲劇的宇宙の基本的顔立は、十分垣間見られる。（なお、この翻訳に際しては、鬼頭哲人氏の御訳業を参照させて頂いた。付記して感謝の意を表したい。）

服るとも夕にぬる多きも
でさえ多くの偉人を生み出
つながらに併せ持っておら
お言葉が私にとりまして有
の御迷惑になるのを恐れま
りながら、ただ閣下お一人

序 文³

この戯曲については、この後に続く他の戯曲に対してよりは、少々寛大さを讀者諸氏にお願いしても、お許し下さるであらう。これを作った時、わたしはたいへん若かった。当時わたしが作ったいくつかの詩が偶然、才気ある人々の手に渡った。彼らはわたしに悲劇を書くようにすすめ、『ラ・テバイッド』の主題を提案した。この主題は以前「ロトルーが『アンチゴース』の名で扱ったものである。だが彼は三幕の初めに二人の兄弟を死なせてしまった。そのあとはいわば別の悲劇の始まりで、そこから人はまったく新しい興味にうつていく。つまり彼は二つの異なった劇の筋、すなわち一つはエウリピデスの『フェニキアの女たち』、他方はソポクレスの『アンティゴネ』に題材を供したものを、一つの戯曲のなかに合わせたのである。この筋立の二重性は彼の戯曲を損うものであると思う。もちろんこの戯曲は多くの美しい個所に満ちているのはあるが。わたしはエウリピデスの『フェニキアの女たち』にほぼ即して構想を練った。というのは、セネカにおける『ラ・テバイッド』に対しては、ややハインシウスと意見を共にするからである。即ち、彼と同じく、わたしは、それがセネカ自身の悲劇でないばかりか、むしろ悲劇の何たるかを知らぬ美麗句屋の作品であると思っているのである。

わたしの戯曲の大詰めは、少々血腥すぎるかも知れぬ。實際、最後に死なぬ役者は殆ど一人も現われない。しかし、それだから『ラ・テバイッド』なのである。即ち古代の最も悲劇的な主題なのである。

恋愛は、悲劇の中で通常大きな部分を占めるものであるが、ここでは殆どその場所を持たぬ。もし書き直すとしても、より以上の場所は与えないであらう。というのは、二人の兄弟の一人に恋をさせるか、二人ともに恋をさせなくてはならないだらうからである。ところで、二人をまったくとりこにしているこの有名な憎悪に対する関心以外の関心を、彼らに与えるというようなことが考えられようか。あるいは、わたしのし

たように脇役の一人に恋愛を委せなければならない。その場合は、この情念は主題とは関係がなくなり、ただ、取り立てて言うまでもない効果

(1) 初版(一六六四年)にのみ付けられた献辞。ド・サンテニャン公爵(フランソワ・ド・ボーヴィリエ、一六一〇年—一六八九年)は、文芸の擁護者として名高く、自らも文筆をよくした(一六六三年にアカデミー・フランセーズ会員となる)。ラシーヌの「国王陛下の御平癒を祈るオード」を称讃して、ラシーヌに会いたいといった人物である。また、一六六四年には、その年の宮廷の一大行事であった「極楽島の楽しみ」の祝典劇の上演に指導的役割を果たした。

(2) ド・サンテニャン公爵は、一六三〇年代に武將として数々の勲功を立て、また、「フロンドの乱」に際しては、国王方について奮闘した。

(3) この序文は一六七六年の全集版に初めてつけられた。

(4) しかしエウリピデスの悲劇も、エテオクレス、ポリュネイクス、イオカステの死で終わっているわけではない。その後、この悲劇ではまだ生きているオイディプスがクレオンによつてテバイから追放されるくどりと、同じくクレオンによるポリュネイクス埋葬禁止令とそれに対するアンチゴネの抗議とが、導入されている。いわば、ソポクレスの『コロノスのオイディプス』への序であり、また、『アンティゴネ』への序ともなるような部分が、大詰めには置かれていたのである。ラシーヌ自身『フェニキアの女たち』のテキストの余白に、「母と二人の兄の屍骸の上でアンチゴースが発する愁嘆の後に続く部分は、不必要だし、退屈である」と記している。

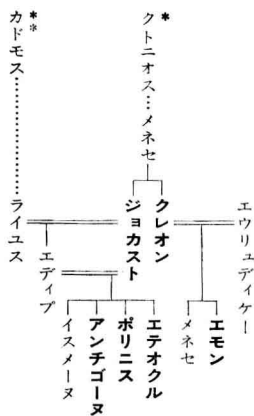
(5) ダニエル・ハインシウス(一五八〇年—一六六五年)。フランドルのゲント生まれの文献学者。彼はセネカの同名の悲劇を、ラシーヌが言うように批判した個所のすぐ後で、『ラ・テバイッド』(「テバイの物語」という題名は非常に不適当だ、として、その理由に、ヘラクレスの狂気にも、オイディプス王にも、バックスの巫女にも当てはまるからだと述べている。ラシーヌはしかし『ラ・テバイッド』と言えば、オイディプスの二人の遺児の戦いの物語として、つまり『テバイ戦記』として、すでにフランス人に馴染みのある題と考えたのだ。なお、ラシーヌのこの作品は、当時、副題の「兄弟は敵同士」の名で呼ばれることが多かった。

を生むにとどまるはずである。つまり、わたしは、恋人たちの愛情や嫉妬は、オイディプスとその不幸な一族の物語を構成する近親相姦、親殺し、その他すべての目をおおうような出来事のなかでは、殆ど占めるべき場所を見出だせぬであらうと確信している。

登場人物

エテオクル テーバイの王
 ポリニス エテオクルの弟
 ジョカスト⁽¹⁾ この二人の王子とアンチゴースの母
 アンチゴース エテオクルとポリニスの妹
 クレオン 王子たちと王女の叔父
 エモン クレオンの息、アンチゴースの恋人
 オランブ ジョカストの腹心の侍女
 アタール クレオンの腹心の家来
 ポリニスの軍隊の一兵士
 衛兵たち

舞台はテーバイ、王宮の一室



* テーバイの創建者。

** カドモスが播いた竜の牙から生れたスバルトイ族の一人、カドモスを助けてテーバイの城を築き、その子孫はテーバイの貴族となる。

第一幕

第一場

ジョカスト、オランブ

ジョカスト あの人達は撃つて出たのだね、オランブ。ああ、思えば胸も張り裂ける！

東の間の憩いのあとに、どれ程の涙を流さねばならぬことか。

この半歳、わたしの目は涙に明け暮れ、

このような不安のなかでは、眠りさえそれを閉ざしてはくれぬ。

いつそ死が永劫にこの目を閉ざしてくればよい、

そしてこの世にもおぞましい非道な罪を、見ずにすませてくれますように！

で、もう戦さを始めたのかい？

オランブ 城壁の上から

見ましたところ、はや全軍は戦陣を敷き、

はや物の具の煌めきは至るところを埋め尽くしておりまして。

それ故 お妃様にお知らせ申そうと、皆より戻って来たのでございませう。

す。

刃を高くかざしたエテオクル様のお姿も、しかと拝しました。

先頭を切ってお進みになり、その氣負い立つ勢いは、

世にも雄猛き武将にも、勇武の鑑となるお心。

ジョカスト もはや疑う余地はない、オランブよ、二人は殺し合うのだ。

急いで姫のもとへ行き、事態を知らせ、直ちにここへ来るようにと。

私が待っているのです。正義の神よ、か弱き我が身を支えたまえ。さあ、オランブ、あの人非人どもの後を追わねばなりません。

二人を引き離すか、さもなくば、二人の手にかかってわたしが死のう。その呪わしい日が、あさましいこと、遂に来た！

それを思うだに恐ろしく、この身は切られる思いであつた。

祈りも涙も何の役にも立ちはず、

運命の怒りは、あくまでも満足させられねば気がすまなかったというわけ。

ああ陽の神よ、この世に光をもたらす方よ、

その光を何ゆえ夜の暗黒の中に打ち捨ててお置きにならなかったのか！

この呪わしい大罪にもあなたはその光を当て、

我が目のあたりの出来事を、おぞましいとも思わずに御覧になれると

でも言われるのか。

ああ、しかし、このような極悪非道な行ないにも驚かれはせぬであらう。

ライユスの一族はそれを日常茶飯事にしてしまったのだから。⁽³⁾

(1) 一六六四、七六年版では、「イオカスト」と書かれている。第五幕最後のクレオンの「ポリニス、エテオクル、イオカスト、アンチゴーヌ」という一行は、イオカストと読まないとし、二音節詩が成立しないから、すべてを、「イオカスト」と読む方が適当なのかも知れないが、便宜上、フランス語読みとして普通に行なわれているジョカストを採用した。

(2) ジョカストが眠っているうちに城門から撃つて出たテーパーイ軍のこと。ロトルの『アンチゴーヌ』のジョカストとイスメーヌの対話の冒頭に、同様の台詞があることから、そう判断すべきだとメナールは言う。

(3) 冒頭のこのジョカストの台詞で、運命の決せられる「悲劇の一日」の自覚が、悲劇の人物の特権的時間構造と共に強調され、また、「ライユスの一族」にまつわる「神々の呪い」として、ある特定の一族にふりかかる宿命のテーマが打ち出される。

父と母の犯した罪のあとでは、我が息子達の罪、御覧になっても恐ろしくない筈。

息子達が不忠者であれ、二人ながら悪人であれ、果ては、兄弟殺しであろうとも、驚かれまい。

あの子達が不倫の血を引くことは御存じのとおり、彼らが善徳の士でもあらうものなら、かえって驚きもなさろう。

第二場

ジョカスト、アンチゴース、オランブ

ジョカスト 姫は知っていますか、我々の悲運の極みを。

アンチゴース はい、母上。お兄様たちの狂気の沙汰はうかがっております。

ジョカスト さあ、アンチゴース、この足ですぐさまかけつけ、出来ることなら、兄弟殺しの腕を押しとどめよう。

何にもまして二人の心を動かすものを、目の前に見せてやるのです。それでもわたしたちに対して抗うことが出来るかどうか、

それとも二人は、浅ましい狂気の中で、己れたちの血を浴びるために、わたしたちの血をも流そうとするのかどうか。

アンチゴース 母上、もうお終いです、王様御自身がお見えになりました。

第三場

ジョカスト、アンチゴース、エテオクル、オランブ

ジョカスト オランブ、手をかしておくれ。倒れそうだ。生きた心地もない。

エテオクル 母上、どうなさいました？ そのように取り乱されて……

ジョカスト

お前の衣服についた血の痕は、一体何なのですか？

それは弟の血かい？ まさかお前のは？

エテオクル いや、母上、どちらのでもありません。

ポリニスは、今までのところ、自分の陣営にとどまり、戦いに姿を見せてはおりません。

ただアルゴス勢のうち向うみずな一隊が、

我が城壁の出口を手中におさめんと戦いを挑んで来たのです。

その身の程知らずの奴らには、わたしが砂を噛ましてやりました。

お目にとまったこの血こそ奴らの血です。

ジョカスト しかし、一体何をしようとしたのです？ 突然戦場へ撃つて出たとは、

どんな激情に駆られたのです？

エテオクル 母上、あのように行動を起こすべき時が来たのです。

いかにもここにどまつていては名誉を失ったに違いない。

すでに飢饉のおそれにとりつかれた人民どもは、

わたしが弱腰なので不平を鳴らし始め、

わたしを王位につかせたのに、

授けられたその位を守ることも出来ない男と非難する。

人心は満足させねばなりません。そうすれば今後、何事が起きようとも、

テーバイは、今日からもはや因われの身ではなくなるでしょう。

この城には、我が軍勢は一兵たりとも残してはおかず、

テーバイはただ戦いの審判者になつてくれればよいのです。

我が方には戦陣へ打って出る十分な力がある。

この上は、幾ばくかの幸運が我が運勢に味方すれば、身の程知らずのポリニスと奴のこしやくな連合勢には、テーバイの囲みを解かすか、さもなくば、我が足元に全滅の憂き目を見させてくれよう。

ジョカスト お前たちはそのような血でお前の武器をけがすことが出来るとしても？ ああ、神よ！

王冠がお前の心をそれ程までに迷わすというのか？

それを得るために弟殺しが必要でも、

ああ、我が子よ、そのようなことまでして、王位につきたいというのですか？

しかし、名譽を重んじる心の声をきくならば、お前次第なのだよ、罪の手も、また今は猛り立つお前の怒りにも頼らずに、

わたしたちに平和をもたらすことも、また、お前の弟を満足させ、彼と共に王位につくことさえも出来るのだ。

エテオクル 母上の言われる王の位とは、わたしの王冠を分け合うこと、わたしの権利で得たものをおめおめ譲り渡すことなのか？

ジョカスト お前も知っている筈、掟により、血統により、お前同様あの子にも、この高御座につく権利は与えられている。

エディブは、その悲運の御生涯を終えられる時、各人が一年ずつ治めるよう、お命じになった。

統治するにも国家は一つ、そこで、

お前達が交互に王位につくようお望みになったのです。この条件は、お前も承知してくれた。

運命は先ず最初にお前を国家の大権に招じ、

お前は玉座に登った。あの子は少しも妬まなかったのだよ。それなのにお前は、あの子に王位を譲るのがいやだと言いなのかい？

エテオクル そうです、母上。奴はもう政權を望むべきではない。

テーバイはあの御決定に従うのを欲しませんでした。奴が玉座に即きたがったとき、

奴を追放出来たのは、わたしではなく、テーバイだったのです。

テーバイは奴が権力を握るのを怖れていないとおっしゃるのですか？この半年、奴の暴虐をはつきりと思ひ知らされて来たのですよ。

武器と兵糧攻めに訴えて、戦いを挑んで来た

あの人非人の王子に、テーバイは服従したがるでも？

ミケナイの傀儡にして、いまやテーバイの全人民に憎しみのみを抱く者、その上、卑劣にもアルゴス王に膝を屈し、

驕れる敵と結婚によって通じたあの男を、

テーバイが王として迎え入れるでもおっしゃるのか？

アルゴス王が婿として奴を選んだ時、

奴は自らの手でテーバイが灰燼に帰するのを見たいと願ったという。

愛情などはこの恥知らずな結婚に棄にしたくもありはせず、

ただ腹立ちまぎれ、華燭の典を挙げたのです。

テーバイは奴の桎梏から逃れるためにわたしに王冠を与えたのだ。

その願うところは、わたしの手で奴の暴虐にどめをさすこと。

わたしが約束を破ったとおっしゃるなら、テーバイをこそ糾弾されることだ。

わたしはその国王ではない、むしろテーバイにつながれた身なのですから。

ジョカスト 言うがよい、遠慮をせずと、浅ましい親不孝者、

王冠の外に心ひかれるものは何もないと、むしろ言うがよい。

いや、それもわたしの思い違い。位がお前の氣に入ったのではない。

そうなのだ、お前の心をそそのめるのはただ一つ、罪を犯すこと。

(1) ポリニスはミケナイおよびアルゴスの王アドラストスの庇護を受けている。この王は、彼に息女を与え、かつ自ら、アルゴス軍を率いて、ポリニスをテーバイへ帰還せしめようとする。

それならよい！　そこまで罪に餓えているとお言いなら、お前の血につながるものを二人一度に殺させてあげよう。弟の血を流すがよい。そしてそれでも不足なら、

それに加えてこのわたしの血をもあなたに流させてあげるつもりだ。そうしなければもうお前には、征服すべき敵もなし、

乗り越えるべき障碍も、また犯そうにもはや罪はない。

玉座を狙う、うるさい競争相手も、もはやなく、大罪人中の大罪人に、お前はなれるに違いない。

エテオクル　よろしい、母上、分りました。御意に添わねばなりませんまい。

王位を退き、弟に王冠を授けましょう。

母上の不正な企みに力をかして、わたしは

彼の王であることをやめ、彼の臣下になり下がります。

そして母上の喜びを絶頂に高めるため、

わたしは彼の狂気の餌食にならねばなりませんまい。

わたしが死ねば……

ジロカスト

ああ、神よ、何というむごいことを！

お前にはわたしのこの胸の裡が何にも分っていない！

わたしはお前が王位を退くのを望んでいるのではない。

これからも国を治めておくれ、それがわたしの望むところ。

ただ度重なる不幸がお前に憐みの心をおこさせ、

多少なりともわたしに対し優しい気持を持っていてくれるのなら、

そして何よりも御自分の名誉を大事と思うお前ならば、

この至高の榮譽、弟にも与らせてやっておくれ。

あの子がお前から受け取るのは空しい替れだけ、

それでお前の治世は、いやがうえにも強固になり安泰になるのだよ。

人民も、この崇高な徳を讃えて、

かくも心の高潔な王をいつまでも君主と仰ぎたいと願うに違いない。

そしてこのように光輝ある努力を払えば、お前の權威を落すどころか、

お前は最も正しい、最も偉大な、王の中の王になれるだろう。しかし、これ程までのわたしの望みにもお前の心は折れず、こんなことでは和解は出来ぬ、

王冠の魅力は捨て切れぬというのなら、せめて、数時間でよい、戦さは止めて、わたしに心の安らぎを与えておくれ。

母の涙に免じてこの願いを聞き入れておくれでないか。

そうすれば、その間に、わが子よ、わたしはお前の弟に会って来よう。

あの子の胸に憐みの心が湧くかもしれぬ。

そうでなくてもせめて、これを限り、あれに別れを告げてこよう。

さあ、今すぐに、わたしを行かせておくれ。

あの子の陣営までわたしは行く、行くのに護衛はいりません。

私の当然至極な嘆きをみれば、あの子とて心を動かされよう。

エテオクル　母上、お出掛けにならずとも、奴にお会いになれます。

その会見、母上がそれ程までに御執心ならば、

一時武器をおさめるのは奴次第です。

今すぐにも母上のお望みは叶えてさしあげられる、

この宮殿まで奴を呼びつけることも出来ましょう。

いやそればかりではない。奴がわたしを裏切者呼ばわりするのが、

現実には全く間違ひであり、またわたしが、

おぞましい暴君などではないことを、知らしめるべく、

民の声も神々の声も聞かせてやろう。

もし人民が賛成すれば、わたしは奴に位を譲る。

が、しかし、奴もまた従うべきだ、もし人民が奴を追放と決めた時は

な。

わたしは誰にも強制はしない。誓って言おう、

テーバイの民に、自分達の王を選ぶことをまかせるものだ。